

開催報告書

企画名：第7回 新潟県の総合診療専門研修をもっと知ろう!イベント

Niigata GP Impact Forum

日時：2025 年 5 月 31 日

主催：新潟大学医学部医学科総合診療学講座

新潟県総合診療専門研修プログラム連絡会議

企画協力：GP Impact Hub（一般社団法人 MATSURI）

1.企画概要（背景・目的）

医学生/若手医師は、総合診療医キャリアの選択において、認知層、興味関心層、比較検討層の順に動機を高めていき、最終的に選択に至る。新潟県における正課/非正課の多様な卒前教育により、医学生/若手医師は総合診療医キャリアを選択肢として認知しており、興味関心層も着実に増えている。イノベ枠などの取り組みの結果、初期研修医数は増え、総合診療専攻医キャリアを選択する若手医師が増えてきている。

この流れを加速し、総合診療専攻医を増やすため、『総合診療医の素晴らしい研修拠点=新潟』というブランディングを構築し、県内外の医学生、研修医、専攻医、指導医、県職員らが一堂に介し、共に学び、対話をする機会の創出を目的とした。

本会では、全国の都道府県で総合診療医育成に特化してキャリア研修事業を提供している山地 翔太 先生（藤田医科大学総合診療科 専攻医/GP Impact Hub 代表）を招聘し、症例検討とキャリアをテーマにしたワークショップを開催いただいた。



2. イベント概要

■スケジュール

- 13:30-14:00 受付
- 14:00-14:30 山地先生 講演「総合診療医を増やすためには？」
- 14:40-15:40 アイスブレイク「私にとって新潟とは？総合診療とは？」
- 15:50-16:50 症例検討ワーク「専攻医の症例を追体験、あなたなら、どうする？」
- 17:00-17:45 キャリアワーク「世代や立場を超えて、価値観や生き方について語る」
- 17:45-18:00 全体振り返り
- 18:00- 懇親会

■講師

○山地翔太（藤田医科大学総合診療科 専攻医/GP Impact Hub 代表）

■講師補助

○中野 翔（松戸市立総合医療センター 研修医/GP Impact Hub）

○伊良波 里奈（南生協病院 研修医/GP Impact Hub）

○一原 愛心（鹿児島大学医学部医学科4年/GP Impact Hub）

山地先生 講演「総合診療医を増やすためには？」

GP Impact Hub という活動についてご説明いただき、他県での取り組みについてもご共有いただいた。トップダウンではなく、医学生・研修医・専攻医を主体としてボトムアップ型で企画を立ち上げ、指導医や県職員、時には高校生や地域住民まで多様なステークホルダーが一堂に会し、総合診療について学び、対話し、考える構成を大切にされていた。



アイスブレイク「私にとっての新潟とは？総合診療とは？」

地元である新潟が居心地が良く、大好きであること。

新潟に来て、ここが第二の故郷になったこと。

離れられなかったところ。気づけば帰ってきたところ。

一人一人が新潟への思いや総合診療について感じていることを語り
世代を超えて、All Niigata としての一体感が強くなっていった。



症例検討ワーク「専攻医の症例を追体験、あなたなら、どうする？」

透析見合わせを希望する高齢者女性を前に倫理的葛藤を抱えた専攻医の経験症例が提示され、「自分なら、どうするか」という問いを前に、各人が自分の価値観や考えと向き合った。他社の語りに耳を傾けながら、多様な考えがあることを学び、答えが出ない問いと向き合い続けるレジリエンスやプロフェッショナリズムが現場に求められていることを学ぶ機会となった。

指導医陣からは「総合診療医らしい症例」「専攻医の悩みや指導医のフィードバックの様子を追体験できる良い機会」という声や、専攻医からは「新潟はホスピタリスト的な先生が多く、こういう家庭医的な学びは斬新で面白かった」という声があった。

一方で、研修医からは「倫理的問題は、医師であれば誰でも経験することでは?」「これは総合診療医の仕事なのか?もっと診断学的なことをやった方が良いのでは?」という、人文学的な側面に限らず、臨床推論や診断学的な側面についての学びを求める声もあがり、今後の続編への期待や、総合診療医とは何かについて議論が深まるきっかけになった。



キャリアワーク「世代や立場を超えて、価値観や生き方について語る」

従来の一方向性のキャリア講演のスタイルとは異なり、フラットかつ双方向性で、自分の人生と向き合い、語り合うワークショップが開催された。各人が自分の人生で大切にしてきた価値観や、自分の人生を変えた人物との出会いや経験、困難や挫折を乗り越えた経験などを語り、世代を超えた相互理解と一体感が生まれていった。





懇親会

真剣な対話と議論をしていた会の雰囲気から一転し、柔らかく穏やかな雰囲気に変わり、多世代で闊達な交流が行われました。



3. 結果

■参加人数：計 50 名（講師含む）

人数（人）	医学生 （県外）	医学生 （県内）	研修医 （県外）	研修医 （県内）	専攻医 （県外）	専攻医 （県内）	指導医 （県内）	計
全体	4	5	2	8	1	6	24	50

■参加者のポジティブな感想（アンケート結果及び、事後ヒアリング結果を含む）

（県内医学生）

- ・「実際に総合診療医として活躍している先生方から色々な話を聞くことができとても良い学びになった」
- ・「医師として患者さんに医療を提供するリアルさ、難しさを感じることができた。まだ医学生になって2ヶ月で難しい話もあったが、普段大学に行っているだけでは分からない経験をすることができた」

（県外医学生）

- ・「これだけ多くの指導医の先生方とお会いできた会は、他県ではなかった。まさしく All Niigata という印象を受けた。懇親会も、指導医の先生方の個性の豊かさや結束力の高さが感じられ、これからこの分野に飛び込む学生や研修医にとって柱のような温かい存在だと感じた」

（県内研修医）

- ・「会が終わった後すぐに、次は自分に何ができるだろうと思い、講師の山地先生に相談の連絡をした。新潟県に総合診療医が増えてほしいと思っているし、自分も何かしたいと感じた」
- ・「学生から先生方まで世代関係なくグループになってお話したことで、新たな視点に気づくことができた。皆さんそれぞれが総診に対する熱い思いを持っていることに刺激を受け、自分がなぜ総診に興味があるのかなど自分自身の気持ちを再確認することができた」

(県内専攻医)

- ・「新潟県の先輩医師達は、情熱や芯のある考え方を持った方がいると知っていたが普段はなかなかそういう踏み込んだお話を伺うことができなかった。今回の会で、普段は少しシャイな性格の新潟の先生方から深い価値観や考えを伺うことができ、新潟でもこのようにオープンに想いや考えを共有していけることに感動した。やはり新潟で挑戦していきたいと思える、希望溢れる会であった。今後、もっと若手中心で色々な学びの機会をつくっていきたい」
- ・「様々な背景の方々が集まって、同じ問題に対して考えをお互いに発表し合う貴重な時間をいただいた。特に普段「上司」として接する上の世代の方の率直な意見や考えをきくことができ、とても新鮮だった」

(県内指導医)

- ・「新潟の県民性で、皆シャイだから、はじめは固い空気もあったが、会が進むごとに、少しずつ場があたたまっていった。これだけ多世代が多く集い、闊達に議論できたことは素晴らしかった」
- ・「普段、なかなか指導医がこのような話す、語るという機会はなかったと思う。指導医にとっても有意義な時間になったのではないだろうか。皆、楽しんでいたように見えた」
- ・「新潟には既に熱い思いを持った医師が多くいたが、山地先生らが火付け役になってくれた」

■今後への期待が込められた感想（アンケート結果及び、事後ヒアリング結果を含む）

- ・「今回と同じような勉強会をまたしたい」
- ・「いい勉強会なのに、広報が弱い印象」
- ・「症例検討がしたい」
- ・「総合診療の臨床的側面の高みを感じられる学びがしたい」
- ・「専攻医や指導医の話がもっと聞きたい」
- ・「専攻医研修や専門医取得後の働き方や生活について知りたい」

4. 考察と今後の展望

■考察

1. 参加者構成と規模

参加者は合計 50 名で、過去回と比して類をみないほど多くの参加があった。

内訳は、医学生 9 名（18%）、研修医 10 名（20%）、専攻医 7 名（14%）、指導医 24 名（48%）であった。医学生、研修医に関して、絶対値としては例年より多くの参加があった。一方で、非常に多くの指導医の協力が得られ、指導医：若手医師・医学生の比率が 1：1 であり、4 人 1 組の各テーブル毎に、指導医が 2 人ずつ配置される形となり、手厚く充実したフィードバックの環境が整っていた。一部の指導医からは、医学生がテーブルにいなかったという声もあがり、より多くの医学生の参加が期待されていた。懇親会では、世代を超えた交流や同世代の交流が盛んにあり、人数の多さと世代の多様性が会の盛況に繋がった。

2. 目標の達成度

①総合診療の勉強会スタイルに関する学び

山地先生を招聘し、これまでにない総合診療医の勉強会のスタイルを学ぶという観点では、大きな収穫があった。発言と聴く機会を分ける対話の仕組み、グラウンドルールやぬいぐるみを使った場の心理的安全性の確保、スケッチブックとクレヨンによる参加者の創造性の刺激、双方向性・多方向性を積極的に活用して闊達な議論と一体感を場に生む手法、指導医が参加者として同じテーブルにつく手法、答えの出ない問いを持ち込むことで世代や立場を超えて対等に議論ができるフィールドをつくる手法、名札にあだ名を書いて硬くない雰囲気や関係性を育む手法など、今後の企画に活かせる小さなテクニックを学ぶことができた。

②世代を超えた All Niigata のネットワーキング

全てのワークを通して双方向性・多方向性の対話の機会があり、県内外の医学生、研修医、専攻医、指導医、県職員らが一堂に介して対話をする機会を持つことができた。また、対話のテーマが自分の価値観に向くものが多く、深い相互理解と関係性が育まれた。会を終えた後には、フラットでオープンな関係性と土壌が広がった。懇親会も盛況であった。

③総合診療医志望者の増加

定量的に参加者の志望順位の変化や興味関心度合いの変化をアンケートで聴取することは、叶わなかったが、定性的には非常に満足度の高い感想が多く寄せられていた。次回企画を期待する声や、自らが会の企画に携わりたいという声もあり、今後は総合診療医志望者の医学生や研修医・専攻医主体での会の企画が期待される。

④『総合診療医の素晴らしい研修拠点＝新潟』というブランディングの構築

本会は県内参加者が中心で、県外参加者は一部にとどまったが、県外参加者から「新潟らしさ」「新潟の総合診療医の雰囲気」について意見や感想を頂くことができた。

「少しシャイだが、芯の通った考えや価値観を持っていて、互いにあたたかいまなざしを向け合える」「県外から新潟にきた人が第二の故郷と感じる居心地の良さ」などの雰囲気が新潟にはあることが伝わったようだ。今後は、県外からの参加者をより多く交え、新潟の総合診療医の価値観や文化へ理解が更に深まり、県外への発信とブランディングに力を入れていくことが期待される。

3. 今後の展望

今回の開催で、一定数の医学生・研修医・若手医師に火がつき、モチベーションが高まった。この勢いをとめず、引き続き県内指導医や県職員にご支援いただきながら、次回以降は県内の医学生・若手医師を中心に、新潟県に縁のある出身者や関心のある県外の医学生・若手医師を巻き込んで、企画を行うことが期待される。具体的には、学びたいことのアイデア出しからスタートしていくと良いだろう。

開催後1-2ヶ月が経過した時点で、医学生・研修医・専攻医の参加者に個別にヒアリングを行った。専攻医からは、本会のワークショップを経験して刺激を受け、日常の診療の中で印象に残っている症例の振り返りを、県内外の多施設合同の同世代と行うことへの意欲や、そうした場に医学生や研修医が立ち会って共に学び、多様な指導医からフィードバックを受ける場を持ちたいという感想が多く寄せられた。研修医からは、専門研修の選択を間近に控え、専攻医の、より具体的でリアルな働き方やライフスタイル、日々の学びやキャリアの考え方に至るまで、聞きたいという意見が寄せられた。既に総合診療専門研修の選択を強く希望している研修医からは、本会のような会の企画運営の手伝いを希望する声が寄せられた。医学生には、既に本会で出会った医師に会いに行き個別に話を伺った者や、見学を希望する者、今後の学びの機会を楽しみにしている者、自ら企画運営に携わりたいと希望する者などがおり、多岐にわたるモチベーション向上の様子が伺えた。